

### 大学生はどのような進路の決めり方が望ましい か

TAZAWA, Minoru / 田澤, 実

---

(出版者 / Publisher)

法政大学キャリアデザイン学部

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要

(巻 / Volume)

5

(開始ページ / Start Page)

71

(終了ページ / End Page)

97

(発行年 / Year)

2008-03

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00007328>

# 大学生はどのような進路の決まり方が望ましいと思っているのか

法政大学キャリアデザイン学部助教 田澤 実

## 1. 問題と目的

### 1-1. 低学年からのキャリア形成支援

近年大学では、企業への就職のみを対象にした支援ではなく、公務員や教員、大学院進学、編入学、留学など卒業後のさまざまな進路選択・決定を支援するキャリア形成支援へとシフトしてきている（川崎，2005a）。特に、大学の早い段階（1、2年生）から、その学生が持っている潜在的能力が目覚めるようにすることが求められている（那須，2004）。

例えば、立命館大学では、学生のキャリア形成のステージを1、2年生対象と3、4年生対象の二段階に大きく分けている。1、2年生は、進路、就職への意識づけから始まって、具体的なキャリア形成をどう進めるのかというきっかけづくりを重視している。具体的には、1）四年間をどうすごすのか、2）学んだことをどう生かすのか、3）将来像のモデル提示、4）ブラッシュアップのためのプログラム紹介、5）インターンシップガイダンスとキャリアカウンセリングという5段階のステップで構成されている（中村，2001）。また、文京学院大学では「Bunkyo-Career Design Program」として学生のキャリアステージを、1年生は「自己探索期」、2年生は「就職準備期」、3年生は「適性発見期」、4年生は「活動実践期」として4つの段階に分けている。ここで、1年生は、後期における必修科目「職業とキャリア」をベースに大まかにキャリアのデザインをし、2年生以降のゼミの選択や目指すべき資格取得の参考することなどが目的とされ、2年生は、新聞の読み方や一般常識を習得することなどが目的とされている（谷内，2005）。これらのような低学年向けのキャリ

ア形成支援として共通していることは、具体的な就職などの相談を行うことを目的とはしていないということである。

進路の決定を問題にする場合、現実の場面においては、自分自身の希望する進路先を決定し、さらに進路先がその意思決定者の採用を決定して初めて決定ということになる（横山，1995）。つまり、在学中に進路を決めるという場合、本人の意思として、希望する進路を決定することが求められ、進路先からの内定というような具体的な形は持たないことが特徴であるといえる。1、2年という低学年が注目される場合、そのときに進路を決定しているか未決定であるかというよりも、進路決定までの過程をどのように考えているのかという視点が重要であると思われる。本研究では、この視点を取り入れるため、望ましいと思う進路の決め方についての考えという指標を用いたい。

## 1-2. 望ましいと思う進路の決め方についての考えのもとになった研究

田澤（2003，2004）は、就職活動を行う大学生が実際にどのような過程で最終的な進路先を決定していったのか捉える指標として希望進路の変化に注目し、それらには拡張型、断絶型、絞込型、単一型、再現型の5つの型があることを明らかにした。田澤（2003，2004）によると、拡張型とは、最初に希望していた進路を希望し続け、さらに新しい進路が現れるものであり、最終的な進路は最初から希望していたものである。断絶型とは、最初に希望していた進路がすべてなくなり、新しい進路が現れるものであり、最終的な進路は新しく希望したものである。絞込型とは、最初に希望していた進路の中から希望しなくなる進路が現れるものであり、最終的な進路は最初から希望していたものである。単一型とは、希望進路が最初から最後までひとつであるものであり、最終的な進路は最初から希望していたものである。再現型とは、最初に希望していた進路がなくなるが、後になってその進路をもう一度希望するようになるものである。

田澤（2003，2004）は、これらの型を大学生が実際にどのような過程で最終的な進路先を決定していったのか捉える指標として用いていたが、本研究では、これらの型を進路決定までの展望を尋ねるものに変更を試みたい。すなわち、これからの進路選択としてどのように決定していくのが望ましいと思うのかを

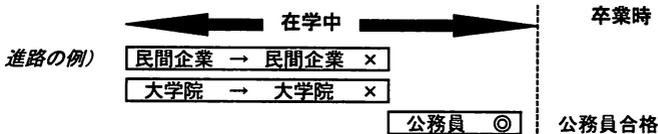
## Appendix 調査用紙 (望ましいと思う進路の決め方についての考え)

あなたは、最終的な進路(大学卒業時)を決定するまでに、どのように決まるのが望ましいと思いますか。以下の型の中から、最も自分の考えに近いものをひとつ選んでください。  
 ※希望進路の変化には「自分の考えの変化」と「落選や不合格」という両方が考えられますが、今回は特にどちらかの場合という形で指定はありません。以下の型で、望ましいと思うものをひとつ選んで下さい。

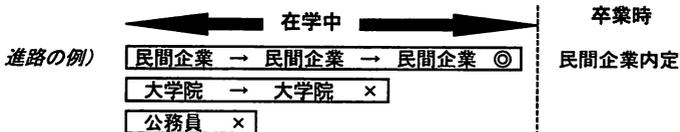
1)拡張型:最初に希望していた進路を希望し続け、さらに新しい進路が現れるもの。最終的な進路は最初から希望していたもの。



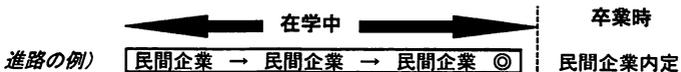
2)断絶型:最初に希望していた進路がすべてなくなり、新しい進路が現れるもの。最終的な進路は新しく希望していたもの。



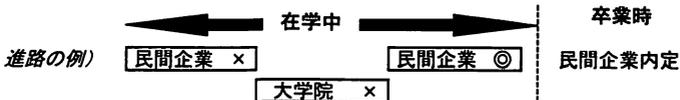
3)絞込型:最初に希望していた進路の中から希望しなくなる進路が現れるもの。最終的な進路は最初から希望していたもの。



4)単一型:希望進路が最初から最後までひとつであるもの。最終的な進路は最初から希望していたもの。



5)再現型:最初に希望していた進路がなくなるが、後になってその進路をもう一度希望するようになるもの。



6)その他

→具体的に

[ ]

→回答欄( )

測る指標に変更するということである。具体的には、田澤（2003, 2004）をもとにして、**Appendix**に示すような調査用紙を作成した。

この指標は、希望進路が同時に複数ありうるという視点、その希望進路が進路決定時まで継続しているか、していないのかという視点が含まれる。そのため、たとえ、現在進路が決まっていない者でも、現在は関心がない進路に、のちのちは関心を持ちうるかという点を検討できるであろう。これは、進路選択においては結果ではなく過程が重要である（藤本、1987；文部省、1983）という進路指導の定義にも沿うものであると考えられる。

### 1-3. 本研究の目的

そこで、本研究では、以下の二点を目的とする。第一に、望ましいと思う進路の決まり方についての考えと、他の進路選択に関する特性との関連を検討し、妥当性を確認する。第二に作成されたこの指標により、大学生はどのような進路の決まり方が望ましいと思っているのか明らかにする。

上記の二点を明らかにするために、具体的には以下の4つの研究を行う。研究1では自我同一性との関連を検討する。研究2では、職業不決断や進路未決定との関連を検討する。研究3では、進路決定の態度との関連を検討する。研究4では望ましいと思う進路の決まり方についての考えが、学年が上がるにつれてどのように変化するか検討し、なぜその決まり方が望ましいと思うのか自由記述より分析を行う。

なお、以下に行う4つの研究における対象者は東京近郊における四年制の大学の大学生であった。学部はすべて文系であった。

## 2. 研究1 望ましいと思う進路の決まり方についての考えと自我同一性の関連

### 2-1. 目的

望ましいと思う進路の決まり方についての考えによって、自我同一性がどのように異なっているか検討する。

## 2-2. 方法

### 対象者

大学生364名（男性117名、女性247名）であった。学年の内訳は1年生89名（男性38名、女性51名）、2年生142名（男性51名、女性91名）、3年生107名（男性17名、女性90名）、4年生26名（男性11名、女性15名）であった。平均年齢は19.87歳、（標準偏差1.49）であった。

### 調査内容

具体的な質問紙の構成は以下のとおりである。

#### 1) 望ましいと思う進路の決め方についての考え

田澤（2003, 2004）は、希望進路の変化には、拡張型、断絶型、絞込型、単一型、再現型の5つの型があることを明らかにした。これらの希望進路の変化は、就職活動を行う大学生が実際にどのような過程で最終的な進路先を決定していったのか捉える指標であったが、本研究ではそれを、最終的にはどのように進路が決まるのが望ましいと思うのかという個人が持つ進路決定までの展望の視点を取り入れた。本研究では、これら5つの希望進路の変化に、「その他」の項目を設け、5つの希望進路の変化で説明できない場合に、具体的な内容を記述するように求め、「あなたは、最終的な進路（大学卒業時）を決定するまでに、どのように決まるのが望ましいと思いますか。」と教示し、Appendixに記述されている、型の名前、型の定義、図示による具体例も提示して、どれに該当するか回答を求めた。その際に、「希望進路の変化には『自分の考えの変化』と『落選や不合格』という両方が考えられますが、今回は特にどちらの場合という形で指定はありません。以下の5つの型で、望ましいと思うものをひとつ選んでください。」という補足的な教示も行った。

#### 2) 多次元自我同一性尺度

谷（2001）によって青年期における同一性の感覚を測定することを目的とした尺度。「自己斉一性・連続性（『過去において自分をなくしてしまったように感じる（反転項目）』など5項目）」、「対自的同一性（『自分が望んでいることがはっきりとしている』など5項目）」、「対他的同一性（『自分のまわりの人々は、本当の私を分かっていると思う（反転項目）』など5項目）」、「心理社会

的同一性（『現実の社会の中で、自分らしい生き方ができると思う』など5項目）の4つの下位尺度からなる。「全くあてはまらない」、「ほとんどあてはまらない」、「どちらかというにあてはまらない」、「どちらともいえない」、「どちらかというにあてはまる」、「かなりあてはまる」、「非常にあてはまる」の7段階評定（1～7点）であった。

## 調査時期

2007年6月～10月であった。

## 2-3. 結果と考察

### 1) 望ましいと思う進路の決めり方についての考え

望ましいと思う進路の決めり方についての考えの度数を表1に示す。拡張型（32.14%）、絞込型（31.59）が多く、合わせて6割以上を占めた。続いて、単一型（19.78%）、断絶型（6.32%）、再現型（4.67%）という順番で多かった。これら5つの型で9割以上を占めていたため、その他は以降の分析から除外することにした。

表1 望ましいと思う進路の決めり方についての考えの度数

|     | 度数  | %       |
|-----|-----|---------|
| 拡張型 | 117 | (32.14) |
| 断絶型 | 23  | (6.32)  |
| 絞込型 | 115 | (31.59) |
| 単一型 | 72  | (19.78) |
| 再現型 | 17  | (4.67)  |
| その他 | 20  | (5.49)  |
| 合計  | 364 |         |

### 2) 多次元自我同一性尺度の分析

谷（2001）によって、詳細にその信頼性・妥当性が検討、確認されていることから、ここで設定されている4つの下位尺度に基づき、該当する項目の得点を合計したうえ項目数で除して尺度得点を求めた。信頼性係数（Cronbachの $\alpha$ ）は、「自己斉一性・連続性」が0.87、「対自的同一性」が0.86、「対他的同一

性」が0.84、「心理社会的同一性」が0.81であった。

### 3) 望ましいと思う進路の決め方についての考えと多次元同一性尺度の関連

望ましいと思う進路の決め方についての考えによって、自我同一性がどのように異なっているか検討するため、望ましいと思う進路の決め方についての考えを独立変数に、多次元自我同一性尺度の5つの下位尺度を従属変数にした一要因の分散分析を行った。その結果、心理社会的同一性得点において、主効果が認められた ( $F[4, 339]=3.21, p<.05$ )。その後、LSD法による多重比較を行った。その結果を表2に示す。再現型の進路の決め方が望ましいと思う者は、拡張型、絞込型の進路の決め方が望ましいと思う者よりも、心理社会的同一性が高かった。すなわち、再現型の進路の決め方が望ましいと考える者は、最初から希望する進路がありながらも、その他の進路との刷り合わせを行う拡張型や絞込型の決め方が望ましいと考える者よりも、現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという自分と社会との適応的な結びつきの感覚が高いことが明らかになった。

表2 望ましいと思う進路の決め方についての考えごとの自我同一性の平均値

|           | 1. 拡張型<br>n=115 | 2. 断絶型<br>n=23 | 3. 絞込型<br>n=113 | 4. 単一型<br>n=71 | 5. 再現型<br>n=17 | F値     | 多重比較  |
|-----------|-----------------|----------------|-----------------|----------------|----------------|--------|-------|
| 自己斉一性・連続性 | 4.38<br>(1.36)  | 4.50<br>(1.46) | 4.48<br>(1.52)  | 4.86<br>(1.39) | 5.11<br>(1.52) | 1.97   |       |
| 対自的同一性    | 4.05<br>(1.33)  | 4.10<br>(1.41) | 3.91<br>(1.31)  | 4.31<br>(1.44) | 4.28<br>(1.32) | 1.05   |       |
| 対他的同一性    | 3.80<br>(1.02)  | 4.22<br>(1.52) | 3.88<br>(1.18)  | 4.16<br>(1.05) | 4.38<br>(1.27) | 2.13   |       |
| 心理社会的同一性  | 4.11<br>(0.90)  | 4.36<br>(1.21) | 4.07<br>(1.06)  | 4.34<br>(1.12) | 4.81<br>(1.07) | 2.61 * | 1,3<5 |

カッコ内の数字は標準偏差

\*  $p<.05$

## 3. 研究2 望ましいと思う進路の決め方についての考えと職業不決断、進路未決定の関連

### 3-1. 目的

望ましいと思う進路の決め方についての考えによって、職業不決断、進路未決定がどのように異なっているか検討する。

## 3-2. 方法

### 対象者

大学生423名（男性136名、女性287名）であった。学年の内訳は1年生76名（男性22名、女性54名）、2年生246名（男性88名、女性158名）、3年生101名（男性26名、女性75名）であった。平均年齢は20.24歳、（標準偏差1.25）であった。

### 調査内容

具体的な質問紙の構成は以下のとおりである。

- 1) 望ましいと思う進路の決め方の考え
- 2) 職業不決断

浦上（1995）によって、就職先の選択における不決断の程度を測定する目的で作成された尺度。浦上（1995, 2001）によって、この尺度の構造は、自分や職業についての情報不足、選択への自信のなさを示す「情報・自信不足」、希望する職業との関連から発生する「希望関連不安」、職業の問題について誰かと相談したい欲求を示す「相談希求」、個人内や個人間の職業選択上での葛藤を意味する「葛藤」、職業には就きたくなく、決定を先送りしたいことを示す「モラトリアム」の5つの下位尺度からなる。「あてはまる」(4)～「あてはまらない」(1)の4件法とした。浦上（1995）は就業を希望しない者については、不決断尺度の分析対象者として含める必要性がないとしつつも、この手続きを採用すると、職業的不決断を原因として、就職から他の進路への方向転換をした者が分析対象者から除外されてしまう可能性があるとしている。本研究では、就職を希望しない者を対象者から除外する作業は行わなかった。

- 3) 進路未決定

第一に、本多（2003）を参考に、「あなたの希望進路は、『卒業後の進路について自分の中で決めている』進路ですか？」の項目を設けた。第二に、若松（2002）を参考にして、「あなたの希望進路は『目指すと決めてもう悩まないし、これ以上具体的に詰めるつもりがない』進路ですか。」の項目を設けた。第三に、「あなたは卒業後の進路としてやりたいことがありますか。」の項目を独自に設けた。それぞれの質問項目に対して、「はい」または「いいえ」の2択で回

答を求めた。

### 調査時期

2004年11月～12月であった。

### 3-3. 結果と考察

#### 1) 望ましいと思う進路の決め方についての考え

望ましいと思う進路の決め方についての考えの度数を表3に示す。絞込型(34.28%)、拡張型(33.10%)が多く、合わせて6割以上を占めた。続いて、単一型(19.62%)、断絶型(6.38%)、再現型(4.02%)という順番が多かった。これら5つの型で9割以上を占めていたため、その他は以降の分析から除外することにした。

表3 望ましいと思う進路の決め方についての考えの度数

|     | 度数  | %       |
|-----|-----|---------|
| 拡張型 | 140 | (33.10) |
| 断絶型 | 27  | ( 6.38) |
| 絞込型 | 145 | (34.28) |
| 単一型 | 83  | (19.62) |
| 再現型 | 17  | ( 4.02) |
| その他 | 11  | ( 2.60) |
| 合計  | 423 |         |

#### 2) 職業不決断尺度の分析

浦上(2001)によって5因子が想定されているため、全34項目について、5因子解で主成分分析、バリマックス回転を用いた因子分析を行った。5因子を抽出する場合に、最も妥当な解釈が可能であった。そこで抽出された因子は、浦上(2001)の因子分析結果とはほぼ同様な構造(第1因子「情報・自信不足」、第2因子「モラトリアム」、第3因子「相談希求」、第4因子「希望関連不安」、第5因子「葛藤」)であった。信頼性係数(Cronbachの $\alpha$ )は、情報・自信不足が0.91、モラトリアムが0.77、相談希求が0.77、希望関連不安が0.72、葛藤が0.79であった。以上の因子分析結果から、因子についての尺度を構成し、該当

する項目の得点を合計したうえ項目数で除して各因子の尺度得点を求めた。各尺度得点の分布に偏りが見られるか確認したところ、極端な分布の偏りは認められなかった。

### 3) 望ましいと思う進路の決まり方についての考えと職業不決断の関連

望ましいと思う進路の決まり方についての考えによって、職業不決断がどのように異なっているか検討するため、望ましいと思う進路の決まり方についての考えを独立変数に、職業不決断の5つの下位尺度を従属変数にした一要因の分散分析を行った。その結果、情報不足得点、葛藤得点において、主効果が認められた（それぞれ、 $F[4,386]=3.02, p<.05$   $F[4,386]=3.58, p<.01$ ）。その後、LSD法による多重比較を行った。その結果を表4に示す。単一型の進路の決まり方が望ましいと思う者は、情報・自信不足得点が他のすべての群よりも低く、葛藤得点が拡張型、断絶型、絞込型の進路の決まり方が望ましいと思う者よりも低かった。

以上より、希望進路が最初から最後までひとつである進路の決まり方が望ましいという考えを持つ者は、相対的に、情報や自信も持ち合わせていることが多く、葛藤も抱えていないことが明らかになった。

表4 望ましいと思う進路の決まり方についての考えごとの職業不決断の平均値

|         | 1. 拡張型<br>n=132 | 2. 断絶型<br>n=27 | 3. 絞込型<br>n=137 | 4. 単一型<br>n=79 | 5. 再現型<br>n=16 | F値      | 多重比較      |
|---------|-----------------|----------------|-----------------|----------------|----------------|---------|-----------|
| 情報・自信不足 | 2.67<br>(0.64)  | 2.90<br>(0.63) | 2.69<br>(0.72)  | 2.45<br>(0.76) | 2.83<br>(0.45) | 3.02 *  | 4<1,2,3,5 |
| モラトリアム  | 1.90<br>(0.58)  | 2.18<br>(0.79) | 1.91<br>(0.62)  | 1.90<br>(0.71) | 2.09<br>(0.59) | 1.40    |           |
| 相談希求    | 2.70<br>(0.64)  | 2.76<br>(0.77) | 2.70<br>(0.56)  | 2.53<br>(0.60) | 2.79<br>(0.56) | 1.51    |           |
| 希望関連不安  | 2.70<br>(0.58)  | 2.72<br>(0.68) | 2.74<br>(0.57)  | 2.68<br>(0.74) | 3.07<br>(0.43) | 1.45    |           |
| 葛藤      | 2.42<br>(0.70)  | 2.57<br>(0.73) | 2.51<br>(0.74)  | 2.14<br>(0.82) | 2.42<br>(0.68) | 3.58 ** | 4<1,2,3   |

カッコ内の数字は標準偏差

\*  $p<.05$  \*\*  $p<.01$

### 4) 望ましいと思う進路の決まり方についての考えと進路未決定の関連

望ましいと思う進路の決まり方についての考えによって、進路未決定がどのように異なっているか検討するため、これら5つの型ごとに、進路決定度を尋

ねる3つの項目それぞれがどのように異なるのか $\chi^2$ 検定を用いて検討した。

まず、「あなたの希望進路は、『卒業後の進路について自分の中で決めている』進路ですか？」の質問項目における回答の度数を表5に示す。 $\chi^2$ 検定の結果、人数の偏りに有意傾向が認められた( $\chi^2$ [4]=9.19,  $p<.10$ )。残差分析によると、断絶型の決め方が望ましいと思う者において、「いいえ」と回答する者が多かった。

表5 各型のあなたの希望進路は、「卒業後の進路について自分の中で決めている」進路ですか？に対する回答

|     | 拡張型           | 断絶型            | 絞込型           | 単一型           | 再現型           |
|-----|---------------|----------------|---------------|---------------|---------------|
| はい  | 114<br>(0.95) | 17<br>(-2.40)* | 117<br>(0.46) | 69<br>(0.66)  | 11<br>(-1.69) |
| いいえ | 23<br>(-0.95) | 10<br>(2.40)*  | 26<br>(-0.46) | 14<br>(-0.66) | 6<br>(1.69)   |

\*  $p<.05$

カッコ内の数字は調整された残差

次に、「あなたの希望進路は『目指すと決めてもう悩まないし、これ以上具体的に詰めるつもりがない』進路ですか。」の質問項目における回答の度数を表6に示す。 $\chi^2$ 検定の結果、人数の偏りは有意であった( $\chi^2$ [4]=28.21,  $p<.01$ )。残差分析によると、絞込型の決め方が望ましいと思う者において、「いいえ」と回答する者が多く、単一型の決め方が望ましいと思う者において、「はい」と回答する者が多かった。

表6 各型のあなたの希望進路は「目指すと決めてもう悩まないし、これ以上具体的に詰めるつもりがない」進路ですか。に対する回答

|     | 拡張型           | 断絶型          | 絞込型             | 単一型             | 再現型           |
|-----|---------------|--------------|-----------------|-----------------|---------------|
| はい  | 28<br>(-1.13) | 4<br>(-1.13) | 22<br>(-2.98)** | 36<br>(4.70)**  | 7<br>(1.72)   |
| いいえ | 109<br>(1.13) | 23<br>(1.13) | 122<br>(2.98)** | 47<br>(-4.70)** | 10<br>(-1.72) |

\*\*  $p<.01$

カッコ内の数字は調整された残差

最後に、「あなたは、卒業後の進路としてやりたいことがありますか。」の質問項目における回答の度数を表7に示す。 $\chi^2$ 検定の結果、人数の偏りは有意

であった ( $\chi^2 [4]=9.89, p<.05$ ) 残差分析によると、断絶型が望ましいと思う者において、「いいえ」と回答する者が多かった。

表7 各型のあなたは、卒業後の進路としてやりたいことがありますか。に対する回答

|     | 拡張型           | 断絶型              | 絞込型            | 単一型           | 再現型          |
|-----|---------------|------------------|----------------|---------------|--------------|
| はい  | 114<br>(1.53) | 15<br>(-2.96) ** | 112<br>(-0.17) | 65<br>(0.02)  | 14<br>(0.42) |
| いいえ | 24<br>(-1.53) | 12<br>(2.96) **  | 32<br>(0.17)   | 18<br>(-0.02) | 3<br>(-0.42) |

\*\* p<.01  
カッコ内の数字は調整された残差

以上より下記のことが明らかになった。断絶型の進路の決め方が望ましいと思う者は、希望進路が、卒業後の進路について自分の中で決めている進路ではない者が多く、卒業後の進路としてやりたいことがない者が多かった。絞込型の決め方が望ましいと思う者は、希望進路が、目指すと決めてもう悩まないし、これ以上具体的に詰めるつもりがない進路ではない者が多かった。単一型の決め方が望ましいと思う者は、希望進路が、目指すと決めてもう悩まないし、これ以上具体的に詰めるつもりがない進路である者が多かった。

#### 4. 研究3 望ましいと思う進路の決め方についての考えと進路決定の態度の関連

##### 4-1. 目的

望ましいと思う進路の決め方についての考えによって進路決定の態度がどのように異なるのか検討する。

##### 4-2. 方法

###### 対象者

大学生911名（男性240名、女性671名）であった。学年の内訳は1年生288名（男性77名、女性211名）、2年生329名（男性93名、女性236名）、3年生242名（男性54名、女性188名）4年生52名（男性16名、女性36名）、であった。平均年齢は19.76歳、（標準偏差1.29）であった。

## 調査内容

具体的な質問紙の構成は以下のとおりである。

- 1) 望ましいと思う進路の決め方についての考え
- 2) 進路決定の態度

横山（2000）による進路決定の態度を用いた。以下の5つの態度から1つを回答してもらうように教示した。それぞれ、1) 進路を決定することに関心があるので、今から積極的に取り組んでいる（以降、関心あり・取り組みあり群）、2) 進路を決定することに関心はあるが、どこから手をつけていいかわからない（以降、関心あり・手のつけ方不明群）、3) 進路を決定することに関心はあるが、卒業まで時間があるので、ゆっくりと考えたい（以降、関心あり・ゆっくり考えたい群）、4) 進路を決定することに今はあまり関心は高くなく、いずれ時期がきたら関心を持つだろう（以降、関心なし・いずれ関心を持つ群）、5) 進路を決めることに今は関心は高くなく、この先もそうだと思う（以降、関心なし・この先も関心なし群）であった。

## 調査時期

2005年4月～7月、2006年10月～11月、2007年6月～11月であった。

## 4-3. 結果

### (1) 望ましいと思う進路の決め方についての考え

望ましいと思う進路の決め方についての考えの度数を表8に示す。絞込型

表8 望ましいと思う進路の決め方についての考えの度数

|     | 度数  | %       |
|-----|-----|---------|
| 拡張型 | 297 | (32.60) |
| 断絶型 | 45  | ( 4.94) |
| 絞込型 | 335 | (36.77) |
| 単一型 | 171 | (18.77) |
| 再現型 | 33  | ( 3.62) |
| その他 | 30  | ( 3.29) |
|     | 911 |         |

が最も多く (36.77%)、その次に、拡張型 (32.60%)、単一型 (18.77%)、断絶型 (4.94%)、再現型 (3.62%) の順で多かった。これら 5 つの型で 9 割以上を占めていたため、その他は以降の分析から除外することにした。

## (2) 進路決定の態度

進路決定の態度の度数を表 9 に示す。関心あり・手のつけ方不明群がもっとも多く (46.21%)、その次に、関心あり・取り組みあり群 (26.89%)、関心あり・ゆっくり考えたい群 (21.41%) の順で多かった。これら三つの回答で全体の 9 割以上を占めていたため、これら三つの回答を以降の分析の対象とすることにした。

表 9 進路決定の態度の度数

|                | 度数  | %       |
|----------------|-----|---------|
| 関心あり・取り組みあり群   | 245 | (26.89) |
| 関心あり・手のつけ方不明群  | 421 | (46.21) |
| 関心あり・ゆっくり考えたい群 | 195 | (21.41) |
| 関心なし・いずれ関心を持つ群 | 43  | ( 4.72) |
| 関心なし・この先も関心なし群 | 7   | ( 0.77) |
| 合計             | 911 |         |

## (3) 望ましいと思う進路の決まり方の考えと進路決定の態度の関連

望ましいと思う進路の決まり方についての考えによって、進路決定の態度がどのように異なっているか検討するため、両者のクロス表を作成した (表10)。 $\chi^2$  検定の結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(8) = 21.24, p < .01$ )。残差分析によると、拡張型は、関心あり・ゆっくり考えたい群の残差がプラスに有意傾向であり、絞込型は、関心あり・手のつけ方不明群の残差がプラスに有意であり、単一型は関心あり・取り組みあり群の残差がプラスに有意傾向であり、再現型は関心あり・取り組みあり群の残差がプラスに有意であった。

以上より、単一型と再現型は、相対的に進路決定状態が良いと解釈できよう。拡張型は、関心はあるがゆっくりと考えたい者が多く、絞込型は関心はあるが手のつけ方が分からないという者が多かった。相対的に進路が未決定な状態で

あると解釈できる。拡張型と絞込型は、軸となる希望進路があることが共通している。しかし、拡張型は今、希望進路がなくても、この後、その他の希望進路が出てくる特徴があり、絞込型はすでに候補となる希望進路が複数存在しているという特徴がある。また、断絶型は、現在の希望進路が続く見通しがない特徴がある。絞込型は、複数の希望進路からひとつの希望進路に移行する際の手のつけ方が分からないため悩んでいると解釈すれば、状態としては進路が未決定であっても、現在の希望進路が続く見通しのない断絶型よりは、進路決定状態に近いのかもしれない。

表10 望ましいと思う進路の決め方についての考えと進路決定の態度の関連

|                | 拡張型              | 断絶型           | 絞込型             | 単一型             | 再現型             |
|----------------|------------------|---------------|-----------------|-----------------|-----------------|
| 関心あり・取り組みあり群   | 83<br>(0.31)     | 11<br>(-0.24) | 74<br>(-2.43) * | 55<br>(1.73) †  | 14<br>(2.10) *  |
| 関心あり・手のつけ方不明群  | 128<br>(-1.84) † | 25<br>(1.53)  | 170<br>(2.16) * | 80<br>(-0.01)   | 8<br>(-2.67) ** |
| 関心あり・ゆっくり考えたい群 | 74<br>(1.88) †   | 5<br>(-1.58)  | 70<br>(-0.05)   | 27<br>(-1.89) † | 9<br>(0.93)     |

† p<.10 \* p<.05 \*\* p<.01 カッコ内の数字は調整された残差

## 5. 研究4 望ましいと思う進路の決め方についての考えの学年差の検討と希望理由

### 5-1. 目的

第一に、望ましいと思う進路の決め方についての考えは学年が上がるにつれてどのように変化するか検討する。

第二に、なぜ、その進路の決め方が望ましいと考えるのか自由記述より検討する。

### 5-2. 方法

#### 対象者

大学生1365名（男性385名、女性980名）であった。学年の内訳は1年生373名（男性101名、女性272名）、2年生582名（男性182名、女性400名）、3年生344名（男性81名、女性263名）、4年生66名（男性21名、女性45名）、であっ

た。平均年齢は19.93歳、(標準偏差1.31)であった。ただし、以下の自由記述については上記のうち、821名に尋ね、731名より回答を得た。

## 調査内容

具体的な質問紙の構成は以下のとおりである。

- 1) 望ましいと思う進路の決め方についての考え
- 2) 上記を選んだ理由についての自由記述

## 調査時期

2004年11月～12月、2005年4月～7月、2006年10月～11月、2007年6月～11月であった。なお、自由記述については、2005年4月以降より尋ねた。

## 5-3. 結果と考察

### 1) 望ましいと思う進路の決め方の考えの学年差の検討

#### 全体の結果

望ましいと思う進路の決め方についての考えの度数を表11に示す。絞込型(35.90%)と拡張型(32.82%)が多かった。続いて、単一型(19.19%)、断絶型(5.49%)、再現型(3.81%)という順で多かった。その他については回答が少数であったのでこれ以降の分析の対象から外すことにした。

表11 望ましいと思う進路の決め方についての考えの度数

|     | 度数   | %       |
|-----|------|---------|
| 拡張型 | 448  | (32.82) |
| 断絶型 | 75   | ( 5.49) |
| 絞込型 | 490  | (35.90) |
| 単一型 | 262  | (19.19) |
| 再現型 | 52   | ( 3.81) |
| その他 | 38   | ( 2.78) |
| 合計  | 1365 |         |

#### 学年差の検討

望ましいと思う進路の決め方についての考えと学年のクロス集計を表12

大学生はどのような進路の決め方が望ましいと思っているのか 87

に示す。 $\chi^2$ 検定の結果、人数の偏りは有意であった ( $\chi^2(12)=28.49, p<.01$ )。残差分析によると、拡張型は1年の残差がプラスに有意傾向であり、3年の残差がマイナスに有意であった。単一型は2年の残差がマイナスに有意傾向であり、3年の残差にプラスに有意であった。再現型は2年の残差がマイナスに有意であり、4年の残差がプラスに有意であった。

以上より、1年の時には、拡張型の進路の決め方が望ましいと考える者が多い傾向が認められ、3年の時には、単一型の進路の決め方が望ましいと思う者が多く、4年の時には再現型の進路の決め方が望ましいと思う者が多いことが明らかになった。

表12 学年ごとの望ましいと思う進路の決め方についての考え

|    | 拡張型              | 断絶型           | 絞込型            | 単一型             | 再現型             |
|----|------------------|---------------|----------------|-----------------|-----------------|
| 1年 | 135<br>(1.71) †  | 20<br>(-0.11) | 129<br>(-0.55) | 64<br>(-1.13)   | 13<br>(-0.36)   |
| 2年 | 205<br>(1.63)    | 31<br>(-0.24) | 216<br>(0.81)  | 99<br>(-1.78) † | 15<br>(-2.05) * |
| 3年 | 92<br>(-2.90) ** | 19<br>(-0.01) | 125<br>(0.07)  | 84<br>(2.77) ** | 17<br>(1.23)    |
| 4年 | 16<br>(-1.44)    | 5<br>(0.80)   | 20<br>(-0.87)  | 15<br>(0.83)    | 7<br>(3.02) **  |

† p<.10 \* p<.05 \*\* p<.01 カッコ内の数字は調整された残差

## 2) 望ましいと思う進路の決め方の考えを選んだ理由について自由記述の分析

望ましいと思う希望進路についての考えについての理由の自由記述は、内容をカテゴリーに分類し、それぞれのカテゴリーの度数を算出した。一人の大学生が複数のカテゴリーについて記述している場合があるので、累積パーセントが100%を超えることがある。自由記述の分類はKJ法を行った。筆者が質問ごとに類似した内容をまとめていく作業を行いながら分類カテゴリーを設定した。

### (1) 拡張型の選択理由

拡張型の進路の決め方が望ましいと思う理由について記述があった者は227名であった。カテゴリーは274個に分類ができた。拡張型の選択理由のカテゴ

リーを表13に示す。選択理由のカテゴリーについては「最初から希望していた」が30.66%と最も多かった。その後、「比較による確信・納得」、「視野の広がり・経験の多さ」、「新たな可能性の期待」、「選択肢の多さ」という順であった。

表13 拡張型の選択理由の自由記述

| カテゴリー         | 記述例   | 度数 (%)     |
|---------------|---|------------|
| 最初から希望していた    | 希望していた進路につけるのが一番ベストであると思う。  | 84 (30.66) |
| 比較による確信・納得    | 選択肢が複数ある中で、最終的に希望する進路を選ぶことが大事だと思う。  | 54 (19.71) |
| 視野の広がり・経験の多さ  | 最初から自分で将来をしょりたくない。視野を広く持ち、いろいろな可能性を考えたい   | 34 (12.41) |
| 新たな可能性の期待     | 今の自分の持っている知識だけで進路を決めるのではなく、これから得る新しい知識や経験から新しい道を見つけていきたい。けど、その中心には、常に自分の理想や夢を忘れないで、それに少しでも近づいていく。 | 32 (11.68) |
| 選択肢の多さ        | 色々な選択肢は必要だと思うから。  | 25 (9.12)  |
| 現在の自分がそうであるため | 自分がそうだから  | 8 (2.92)   |
| 既に決定していた      | もうやりたいことが決まっているから   | 8 (2.92)   |
| 今決まっていないから    | 今は漠然としているから   | 4 (1.46)   |

## (2) 断絶型の選択理由

断絶型の進路の決め方が望ましいと思う理由について記述があった者は39名であった。カテゴリーは40個に分類ができた。拡張型の選択理由のカテゴリーを表14に示す。選択理由のカテゴリーについては「新たな可能性の期待」が32.50%と最も多かった。その後、「進路を見つけた印象」、「そのときやりたいことをやるべき」、「視野の広がり・経験の多さ」という順であった。

表14 断絶型の選択理由のカテゴリー

| カテゴリー           | 記述例  | 度数 (%)     |
|-----------------|--|------------|
| 新たな可能性の期待       | 考えて考え抜く先には新しい答えが待っていることもあるから。そうした縁や勢いがないと、節目の決定は難しいから。 | 13 (32.50) |
| 進路を見つけた印象       | これまで希望していたのがなくなって初めてできた進路だから、そういう挫折があって見出した進路のがいいと思う   | 6 (15.00)  |
| そのときやりたいことをやるべき | 自分がそのときやりたいと思えることをやるのが好ましいと思うから                        | 4 (10.00)  |
| 視野の広がり・経験の多さ    | 最初からひとつにしほらないで、色々経験して最終的に受かったところに決めたい                  | 3 (7.50)   |
| 今関心のある進路がない     | とにかく今は特定の希望の職業はない。こんな感じのという構想はある程度うかんでいるのだが、迷っているから    | 2 (5.00)   |

### (3) 絞込型の選択理由

絞込型の進路の決め方が望ましいと思う理由について記述があった者は265名であった。カテゴリーは282個に分類ができた。絞込型の選択理由のカテゴリーを表15に示す。「比較による確信・納得」が45.39%と最も多かった。その後、「選択肢の多さ」、「視野の広がり・経験の多さ」、「最初から希望していた」、「現在の関心の多さ」という順であった。

表15 絞込型の選択理由の自由記述カテゴリー

| カテゴリー        | 記述例   | 度数 (%)      |
|--------------|---|-------------|
| 比較による確信・納得   | 最初からひとつだけではなく、いろいろな選択肢を視野に入れた上で、絞り込んで決めたいから | 128 (45.39) |
| 選択肢の多さ       | 選択肢は多いほうがいい                                 | 57 (20.21)  |
| 視野の広がり・経験の多さ | 一度きりの人生だからいろいろなことを経験しておこうかなと思ったから           | 39 (13.83)  |
| 最初から希望していた   | 最終的に自分が希望していた職に就けたならいいかなと思ったから              | 25 (8.87)   |
| 現在の関心の多さ     | 今は将来やりたい仕事がいくつがあるかで、これから考えて最終的に絞りたい         | 9 (3.19)    |
| 今決まっていないから   | まだ何も決めていないため、全部の中から絞っていききたい                 | 7 (2.48)    |
| 現在の自分がそうだから  | 望ましいというが自分自身がそうだったから。                       | 2 (0.71)    |

### (4) 単一型の選択理由

単一型の進路の決め方が望ましいと思う理由について記述があった者は146名であった。カテゴリーは164個に分類ができた。単一型の選択理由のカテゴリーを表16に示す。選択理由のカテゴリーについては「準備活動の専念」が33.33%と最も多かった。その後、「初志貫徹」、「迷わずにすむ・後悔しない」、「既に決定していた」、「最初から希望していた」という順であった。

表16 単一型の選択理由の自由記述

| カテゴリー         | 記述例  | 度数 (%)     |
|---------------|--|------------|
| 準備活動の専念       | 現在、公認会計士を目指し、勉強しているが、資格取得までの道のりが険しく、他に手をつけている時間がないため、単一型が一番望ましいと考える。 | 55 (33.33) |
| 初志貫徹          | 自分の意志を貫けるから。   | 31 (18.79) |
| 迷わずにすむ・後悔しない  | せっかく一度決めたのに、心ゆらぎたくないから。決断はひどく疲れるものだから。                               | 26 (15.76) |
| 既に決定していた      | 今なりたいたものが決まっているので、その夢がそのまま吐えばと思うから                                   | 21 (12.73) |
| 最初から希望していた    | 以前から望んでいた職業につけるのがいちばんいいと思う   | 9 (5.45)   |
| 他の選択肢への興味のなさ  | 他の進路には興味はないから  | 7 (4.24)   |
| 現在の自分がそうであるため | 自分がそうだから。  | 4 (2.42)   |

### (5) 再現型の選択理由

再現型の進路の決め方が望ましいと思う理由について記述があった者は27名であった。カテゴリーは27個に分類ができた。再現型の選択理由のカテゴリーを表17に示す。選択理由のカテゴリーについては「戻ることの再確認」が37.04%と最も多かった。その後、「新たな可能性の期待」、「現在の自分がそうだから」、「視野の広がり・経験の多さ」という順であった。

表17 再現型の選択理由の自由記述

| カテゴリー        | 記述例   | 度数 (%)     |
|--------------|---|------------|
| 戻ることの再確認     | 迷うことや他の職業に興味を持つことは大切なことだから、一度、違う職業・進路を考えた上で、はじめに希望していた進路に戻るということは、本当にやりたかったことが何であったか自分自身で確認できる。 | 10 (37.04) |
| 新たな可能性の期待    | 大学に入ってから自分の描いていたイメージというのはバイトや友人といった外的刺激や関係性の中で変化していくものであって入学してから進路が変わるのは自然であると思う。               | 4 (14.81)  |
| 現在の自分がそうだから  | 今の自分がそのような状態だから   | 4 (14.81)  |
| 視野の広がり・経験の多さ | ひとつのことにとらわれるのではなく、視野を広く持って様々な選択肢を考えた上で決めるのが良いと思うから。   | 4 (14.81)  |

### (6) 5つの型における希望理由の類似点

上記までの5つの型において共通して得られたカテゴリーを抽出して、順位をまとめた。表18に示す。

「最初から希望していた」は、拡張型において最も多かった。このカテゴリーは絞込型、単一型で見られた。5つの型の中で継続して希望し続ける進路がない断絶型、再現型では見られなかった。

「比較による確信・納得」は、拡張型において2番目に多かった。絞込型では最も多いカテゴリーであった。

「視野の広がり・経験の多さ」は、拡張型において3番目に多かった。このカテゴリーは、断絶型、絞込型、再現型でも見られた。複数の希望進路のない単一型では見られなかった。

「新たな可能性の期待」は、拡張型において4番目に多かった。このカテゴリーは断絶型においては1番多く、再現型においては2番目に多かった。

「選択肢の多さ」は、拡張型において5番目に多かった。このカテゴリーは

絞込型においては2番目に多かった。

全体的には、拡張型と絞込型では順位は異なるものの共通しているカテゴリーが多かった。

表18 各型における共通カテゴリーの順位

|               | 拡張型 | 断絶型 | 絞込型 | 単一型 | 再現型 |
|---------------|-----|-----|-----|-----|-----|
| 最初から希望していた    | 1   |     | 4   | 5   |     |
| 比較による確信・納得    | 2   |     | 1   |     |     |
| 視野の広がり・経験の多さ  | 3   | 4   | 3   |     | 4   |
| 新たな可能性の期待     | 4   | 1   |     |     | 2   |
| 選択肢の多さ        | 5   |     | 2   |     |     |
| 現在の自分がそうであるため | 6   |     | 7   | 7   | 3   |
| 既に決定していた      | 7   |     |     | 4   |     |
| 今決まっていないから    | 8   |     | 6   |     |     |

#### (7) 5つの型における希望理由の相違点

拡張型で得られた希望理由のカテゴリーはすべて、他のいずれかの型の希望理由のカテゴリーで見られた。そこで、以下には、残りの断絶型、絞込型、単一型、再現型の特徴についてまとめる。

断絶型で最も多いのは、「新たな可能性の期待」であった。これは、現在以降に新たな希望進路が増える拡張型、再現型においても見られた。希望理由のカテゴリーのうち、「進路を見つけた印象」と「そのときやりたいことをやるべき」は、断絶型にのみ見られたものであった(表14)。

絞込型で最も多いのは、「比較による確信・納得」であったが、これは拡張型にも見られた。希望理由のカテゴリーは拡張型と類似していたが、「現在の関心の多さ」は絞込型にのみ見られたカテゴリーであった(表15)。

単一型のうち、上位のものは、単一型にのみ見られるものが多かった。「準備活動の専念」、「初志貫徹」というようにひとつのものを希望し続ける積極的なものから、「迷わずにすむ・後悔しない」という消極的なものまで見られた(表16)。

再現型で最も多かったのは、「戻ることの再確認」であった(表17)。これは再現型にのみ見られた。

## 6. 総合考察

本研究の目的は、第一に、望ましいと思う進路の決め方についての考えと、他の進路選択に関する特性との関連を検討し、妥当性を確認すること、第二に大学生はどのような進路の決め方が望ましいと思っているのか明らかにすることであった。

望ましいと思う進路の決め方についての考えは、自我同一性、職業不決断、進路未決定、進路決定の態度との関連があることが明らかになった。以下に、型ごとに特徴を確認していこう。

### 6-1. 各型の特徴

拡張型の進路の決め方が望ましいと思う者は、進路を決めることに関心があるが、卒業までに時間があるので、ゆっくりと考えたい者が多い傾向が認められた（研究3）。また、望ましいと思う理由には「最初から希望していた」、「比較による確信・納得」、「視野の広がり・経験の多さ」などが見られた（研究4）。これらより、拡張型が望ましいと思う者は、大学生活をしていく中で、新たに自分のやりたいことを発見することを期待しているのではないだろうか。そして、新しく発見した希望進路との刷り合わせをする中で、もともとの自分が希望していた進路で良いことを確認したいものと思われる。

断絶型の進路の決め方が望ましいと思う者は、希望進路が、卒業後の進路について自分の中で決めている進路ではない者が多く、卒業後の進路としてやりたいことがない者が多かった（研究2）。また、望ましいと思う理由は「新たな可能性の期待」が最も多く、続いて、「進路を見つけた印象」と「そのときやりたいことをやるべき」という順で多かった。断絶型は、現在希望している進路が全てなくなり、新たな進路が現れるという特徴がある。若松（2001）は、一般学生の未決定者像のひとつに、興味ある選択肢がなかなか見出せないという特徴を見出しているが、断絶型の進路の決め方が望ましいと思う者も、進路選択への取り組みとしてどこから手をつけていいのかわからず、いま希望している進路がすべてなくなっても仕方ないと捉えていると考えられる。そうであるからこそ、自分が関心を持つ進路が突然現れることを期待しているのかもしれない。

絞込型の進路の決め方が望ましいと思う者は、希望進路が、目指すと決めてもう悩まないし、これ以上具体的に詰めるつもりがない進路ではない者が多く（研究2）、進路を決めることに関心はあるが、どこから手をつけていいかわからない者が多かった（研究3）。また、望ましいと思う理由は「比較による確信・納得」が最も多く、続いて「選択肢の多さ」、「視野の広がり・経験の多さ」、「最初から希望していた」であった。これらの希望理由のカテゴリーは拡張型と類似していたが、「現在の関心の多さ」は絞込型のみに見られた（研究4）。これらより、絞込型の進路の決め方が望ましいと思う者は、すでに自分でやりたいことがいくつかあり、様々な可能性を検討したいと思っているのではないだろうか。

単一型の進路の決め方が望ましいと思う者は、希望進路が、目指すと決めてもう悩まないし、これ以上具体的に詰めるつもりがない進路である者が多く、職業を決断するにあたり、情報や自信も持ち合わせていることが多く、葛藤も抱えていなかった（研究2）。また、進路を決めることに関心があり、今から積極的に取り組んでいる者が多い傾向が見られた（研究3）。また、望ましいと思う理由は、「準備活動の専念」、「初志貫徹」というように積極的なものが上位を占めていた（研究4）。これらより、単一型の進路の決め方が望ましいと思う者はかなり進路の決定状態は良いと考えられる。単一型の進路の決め方が望ましいと思う者の中には、すでに大学入学時に明確に希望する進路を持っていた者もいるのかもしれない。しかしながら、望ましいと思う理由には、「迷わずにすむ・後悔しない」という消極的なものも見られた（研究4）。単一型の進路の決め方が望ましいと思う者の中には、選択肢を拡げることに時間のロスなどへの恐怖を感じている者もいるのかもしれない。

再現型の進路の決め方が望ましいと思う者は、相対的に、自我同一性の一側面である心理社会的同一性が高かった。すなわち、現実の社会の中で自分自身を意味づけられるという自分と社会との適応的な結びつきの感覚が高かった（研究1）。また、進路を決めることに関心があり、今から積極的に取り組んでいる者が多かった（研究3）。望ましいと思う理由は、「戻ることの再確認」という、再現型のみに見られたものがあった（研究4）。これらの結果より、再現型の進路の決め方が望ましいと思う者は進路決定状態が良くないとは考え

がたい。

## 6-2. 望ましいと思う進路の決まり方についての考えの学年による違い

1年の時には、拡張型の進路の決まり方が望ましいと考える者が多い傾向が認められ、3年の時には、単一型の進路の決まり方が望ましいと思う者が多く、4年の時には再現型の進路の決まり方が望ましいと思う者が多いことが明らかになった（研究4）。

都筑（2007）は2年のときに流動的であった希望進路が、3年では限定的になると指摘した。流動的になるためには、複数の希望進路が必要である。よって、1年の時に拡張型の進路の決まり方が望ましいと考える者が多いことは、納得のいく結果であると思われる。上記でも述べたとおり、1年の時には、大学生活をしていく中で、新たに自分のやりたいことを発見することを期待している者が多いのであろう。

また、流動的であった希望進路が限定的になる進路の決まり方は、本研究では、絞込型にあてはまると思われる。しかしながら、3年の時には、単一型の進路の決まり方が望ましいと思う者が多く、拡張型の進路の決まり方が望ましいと思う者は少なかった。3年の時期とは、これ以上希望進路を拡げるといことを考えにくい時期ということなのであろう。

上述したとおり、単一型の進路の決まり方が望ましいと思う者はかなり進路の決定状態は良いと考えられた。よって、3年の時に単一型の進路の決まり方が望ましいと思う者が多いことは、納得のいく結果であると思われる。ただし、単一型の進路の決まり方が望ましいと思う理由には、「迷わずにすむ・後悔しない」という消極的な理由があったことには注意が必要であらう。そのような考えを持った者がいたからこそ、流動的であった希望進路が限定的になっていくような絞込型の希望進路の変化を経てきた者でも、3年においては、ひとつの希望進路でこれから進路が決まっていくことが望ましいと考えたのかもしれない。

最後に、4年の時には再現型の進路の決まり方が望ましいと思う者が多かった。上述のとおり、再現型の進路の決まり方が望ましいと思う者は、進路を決めることに関心があり、今から積極的に取り組んでいる者が多かった。4年に

において、進路に関する取り組みがあったということは、就職活動等の具体的な活動としての取り組みに該当するのであろう。よって、実際の活動を通して、戻ることの再確認を望ましいと思い、自分と社会との適応的な結びつきの感覚が高まったと思われる。

### 6-3. 本研究の意義

以上より、望ましいと思う進路の決め方についての考えは妥当性を持っているといえる。それでは、望ましいと思う進路の決め方についての考えから進路選択研究にアプローチすることにはどのような意義があるのであろうか。

川崎（2005b）は、段階的に職業を選択していくという考え方が成り立つためには、いかに絞るかという点に注意が向かいがちであるが、拡げていなければ絞れないという当たり前のことを忘れてはならないと指摘している。本研究では、1年の時には、拡張型、すなわち、最初に希望していた進路を希望し続け、さらに新しい進路が現れることが望ましいと考える者が多い傾向が認められた。大学の全学的なキャリア支援・キャリア教育担当にアンケートを実施した上西（2006）は7割以上の大学が低学年からの全学的なキャリア支援・キャリア教育について、具体的な職業を早期に定めるよりも、幅広い見識をそなえ幅広い経験を積ませることが望ましいという方針を持っていることを明らかにしたが、本研究では、大学の方針としてだけでなく、その支援の受け手である大学生自身も、1年において新しい進路が現れることが望ましいと考える者が多い傾向があることを指摘したといえる。

一方で、単一型のような、新しい進路が現れるよりも、ひとつの希望進路が続くような決め方が望ましいと考える者が低学年であっても一定数存在することも分かった。単一型が望ましいと思う者は総じて、進路決定状態が良いと考えられたが、一方で、「迷わずにすむ・後悔しない」という消極的な理由も見られたことから、選択肢を拡げることへの時間のロスなどへの恐怖を感じている者もいることが考えられた。このような考えを持つ大学生に対しては、大学がたとえ、幅広い見識をそなえ幅広い経験を積ませることが望ましいという方針を立てて支援を行ったとしても、その支援が届かない可能性があることには注意が必要であろう。

以上のように、望ましいと思う進路の決まり方についての考えという指標を取り入れたことにより、この先、進路をいかに拓げうるかという点を検討できたことは本研究の意義であると思われる。

#### 6-4. 今後の課題

本研究は、すべて横断的研究であった。学年差を検討することにより、その変化を検討することができたが、今後は縦断的研究が望まれるであろう。

#### [引用文献]

- 藤本喜八 1987 進路指導の定義について 進路指導研究, 8, 37-39.
- 本多陽子 2003 大学生が進路決定できないときに感じる悩みと進路決定に関する信念との関連 日本青年心理学会第11回大会発表論文集, 38-39.
- 川崎友嗣 2005a 変わる私立大学「就職支援」から「キャリア形成支援」へ IDE, 467, 45-49.
- 川崎友嗣 2005b 大学におけるキャリア教育の展開：学ぶ力と生きる力の教育 大学と教育, 41, 44-62.
- 文部省 1983 中学校・高等学校進路指導の手引：中学校学級担任編<改訂版>日本進路指導協会.
- 中村清 2001 大学変革哲学と実践：立命館のダイナミズム 日経事業出版社.
- 那須幸雄 2004 わが国大学におけるキャリア教育の現状と動向：中部、関西、九州の代表的9大学に見る事例研究 文教大学国際学部紀要, 15, 81-96.
- 谷冬彦 2001 青年期における同一性の感覚の構造：多次元自我同一性 (MEIS) の作成 教育心理学研究, 49, 265-273.
- 田澤実 2003 大学生の進路選択過程における希望進路の変化 (2)：就職活動開始から終了までの意思決定プロセス 日本教育心理学会第45回総会発表論文集, 568.
- 田澤実 2004 大学生の進路選択過程における希望進路の変化 (3)：自主留年した大学5年生に対する追跡的面接調査からの検討 日本教育心理学会第46回総会, 348.
- 都筑学 2007 大学生の進路選択と時間的展望：縦断的調査にもとづく検討 ナカニシヤ出版.
- 上西充子 2006 大学におけるキャリア支援・キャリア教育に関する調査報告書 法政大学大学院経営学研究科キャリアデザイン学専攻調査委員会.
- 浦上昌則 1995 女子短期大学生の進路選択に対する自己効力と職業不決断：

大学生はどのような進路の決め方が望ましいと思っているのか 97

Taylor & Betz (1983) の追試的検討 進路指導研究, 16, 40-45.

浦上昌則 2001 進路選択に対する考え方と職業不決断 アカデミア (人文・社会科学編), 72, 167-186.

谷内篤博 2005 大学生の職業意識とキャリア教育 勁草書房.

横山明子 1995 コンピュータによる進路決定支援システムの構築 (2) 帝京大学理工学部研究年報人文編 5, 139-166.

横山明子 2000 大学生のための進路指導 日本教育心理学会第42回総会発表論文集, 475.

若松養亮 2001 大学生の進路未決定者が抱える困難さについて: 教員養成学部の学生を対象に〜 教育心理学研究, 49, 209-218.

若松養亮 2002 大学生の進路未決定者が抱える困難さの分析: 決定者における「決定できた経緯」からの考察 日本教育心理学会第44回総会発表論文集, 416.